軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第６４号
2026.04.24

ショパンを弾けるようになりたい！

佐々木　毅（ テノール ）

「自宅にグランドピアノを置く」という念願は叶ったのですが、道具は立派でも肝心の腕前の方が上がらないことが残念です。それでも私の鍵盤楽器歴をさかのぼると記憶は定かではないですが、小学校１年生頃からオルガン教室に通い始めたのが最初です。東京の（たぶん）渋谷で開かれたオルガンの発表会に出た写真が残っているものの、何を弾いたのかは全く記憶がなく、「(渋谷で）とてつもなくでかい歩道橋を見た」という、どうでもよい記憶だけが残っています。

小学校３年生まではオルガンを習っていたのですが、先生の部屋にあったピアノに興味を持ったらしく、４年生の１年間だけピアノを習いました。しかしながら不真面目な生徒は他の遊びに夢中で、教室に通う直前に慌てて練習するも練習不足を先生に指摘されて、いつも叱られていたように思います。

教室をやめる前に練習していたのは「メトカーフの優美なワルツ」など簡単な数曲で、結局ピアノへの興味が薄れていき、５年生以降は野球少年となってしまいました。中学生以降は野球からバスケットボールに転向し、引き続きピアノとは縁遠い生活となっていました。今思えば、この頃しっかり練習していれば、現在こんなに苦労しなかったのではないかと悔やまれます。

そんな私が再びピアノに戻ってきたのは大学に入ってから。小学生の頃からクラシック音楽の鑑賞をしていた私は、この頃にショパンのピアノ曲を聴いて感銘を受けていたこともあり「何とかこれらの美しい曲を弾けないものか」と無謀ともいえる思いを持つことになります。そして、いきなりノクターン２番の楽譜を購入して家のアップライトピアノで練習を始めたのでした。(この曲はノクターンでは最も有名ですね)

経験があるといっても素人が突然「ショパン」ですから上手くいくはずもなく、譜面を見ながらだと手が動かないため、「少しずつ覚えながら弾く」を繰り返して最初の数小節を覚えるのに１週間くらい要した記憶があります。１曲まるまる覚えるのに３か月くらい費やしたのではないでしょうか。その頃の楽譜には、一音ずつ「ドレミ…」をふるなど涙ぐましい記録が残っています。(後で見返すと暗譜の間違いも多々ありましたが…)

ショパンのノクターン２番が、ピアノにそれなりに取り組み始めた最初の思い出です。社会人になってからも趣味の一つとして、電子ピアノで細々とショパンの比較的

簡単な曲を練習したり、ショパンの難曲の簡単な部分だけを弾いたりして楽しんでいました。

モーツァルトやベートーベンの曲も少しチャレンジしてみましたが、私には苦手な走句（音階を速く弾く部分）が多くて指が追い付かない。また一度に弾く音数が少なく意外とシンプルにできている（私の偏見）ためごまかしがきかず、私には持て余し気味でした。一方ショパンは音数が多い（これも偏見）ので、テンポが速い曲でなければ何となく形になり演奏できている気分になれました。それでショパンばかり挑戦することに…。

さて軽井沢に引っ越してからは、グランドピアノもあり、時間もたっぷりあり、練習も心置きなくできる環境となりました。（そんなに猛練習しているわけではありませんが…）少しでも指が早く動くように鍛えるため、庭仕事のない冬にハノン（指の筋トレのようなピアノ教本）の練習もしたりして、以前は弾けなかったフレーズが少しずつ弾けるようになってきたように思います。

最近よく弾いている曲は、ショパンのノクターン 2 番（前出）・8 番・13 番、及びバラード 1 番。ノクターンは比較的緩やかな曲で、8 番は左手の分散和音の上に美しい旋律が流れる曲。13 番は深い情緒に満ちた、ノクターンとしては劇的な曲で、どちらもノクターンの中では少し難しいのですが、気に入って何度も練習しています。バラード 1 番は走句もあり極めて難しく、私が弾くと通常の演奏者の 1.5 倍くらいの演奏時間になってしまいますが、何とか全体を覚えたところです。ご興味のある方にはこれらの曲の「プロ」の演奏を聴いていただきたいですね。

ショパンというとワルツなど軽快で親しみやすい曲をイメージされる方が多いかと思いますが、人生後半には芸術性の高い有名な難曲が多く作曲されており、英雄ポロネーズ（作品 53）、スケルツオ 4 番（同 54）、ピアノソナタ 3 番（同 58）、舟歌（同 60）などが含まれます。その中でもバラード 4 番（同 52）は私の最も好きな曲で、いつかはこの難曲が弾けるようになりたいと願っています。（いつのことになるやら…）

ショパン以外の作曲家のピアノ曲も少し始めました。ドビュッシー「アラベスク 1 番」、ラベルの「亡き王女のためのパヴァーヌ」の 2 曲で、以前冒頭のさわり部分だけ手を付けて投げ出していたものに改めて取り組んでいます。これらは皆さんも一度は耳にした曲ではないでしょうか。

さて、毎日のように練習はしていますが、自己流で弾いているにすぎませんので、皆様の前で披露することはないです。暖かくなると窓を開けて練習することもありますので、私の家の近所をお通りになることがあれば、ぎこちないショパンがお耳に入ることもあるかもしれません。ご容赦ください。（笑）

歌は ことば 谷川俊太郎の詩

白枝 庸介（ バ ス ）

今年演奏する反戦歌『死んだ男の・・・』の詩文解釈について、先の TUTTI 58 号に四の五の書きましたが、或る絵本の巻末に収録された談話『 92 歳の谷川俊太郎がいま思うこと』の冒頭部分に、氏のこんな戦争観がありました。

> いまの混沌とした時代についてどう思うか、聞かれることがあるんだけど、僕の場合は、小さいときから戦争が始まっていて、小学生から中学生にかけて東京が空襲されて焼け野原になったりしているのを目の当たりにしてきたんですよ。戦争のリアリティというのを割と小さい頃から知っていたんだね。（中略）
>
> やっぱり戦争は嫌なんだけれど、これはもう、人間の運命というか、宿命みたいなもので、いくら未来になっても戦争は終わらないだろうという感じをもっていますね。
>
> 一種の諦めのようなものなのだけれど、そこに あるリアルな感じ というのを持っていたほうがいいのではないかと思います。人間はやっぱり争うからね。

つまり、この詩の一番から三番は象徴的･比喩的表現ではなく、谷川少年にとってのリアルな戦争の情景であり、四番は救い難い人間の宿痾への達観であったようです。

□死んだ男の残したものは

一. 死んだ男の残したものは
ひとりの妻とひとりの子ども
他には何も残さなかった
墓石ひとつ残さなかった

二. 死んだ女の残したものは
しおれた花とひとりの子ども
他には何も残さなかった
着もの一枚残さなかった

三. 死んだ子どもの残したものは
ねじれた脚と乾いた涙
他には何も残さなかった
思い出ひとつ残さなかった

四. 死んだ兵士の残したものは
こわれた銃とゆがんだ地球
他には何も残せなかった
平和ひとつ残せなかった

五. 死んだかれらの残したものは
生きてるわたし生きてるあなた
他には誰も残っていない
他には誰も残っていない

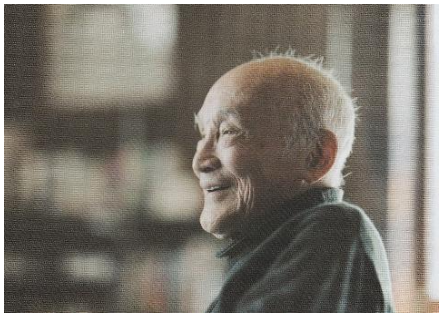
六. 死んだ歴史の残したものは
輝く今日とまた来る明日
他には何も残っていない
他には何も残っていない

谷川俊太郎

しかし五番、六番は、戦争の因果応報や人間の宿命とは別次元の氏の“悠久の自然観”だと思われます。僕には『 過去も未来も無い　あるのは永遠に続く「今」だけ　今を

精一杯生き切れ』との禅僧の説教が聞こえてきますが、いずれにしても眉間に皺(しわ)など寄せずに淡々と歌って良いのでしょう。

歌は「ことば」、言葉は「おと」



文芸誌の谷川俊太郎「特集号」のインタビューに、ことばと文字について語っているものもあります。

『 言語の最初は音でしょう。ひらがなって日本語としてことばの始まりみたいなところがある。表音文字であるひらがなで書くことで昔に遡れる感じがあってね。“質感”みたいなものが日本語の基本にあると思う 』『 今は文字文化のほうが圧倒的。書物が普及すると人は文字を読むことを主とし、声に出す機会は少なくなる 』『 意味を大事にするが、ことばの手触りに近い皮膚感覚的なものを大事にしない。意味ばかり求めずテクスチャーを通じてそれをただ感じること 』・・・

処女詩集『二十億光年の孤独』の「世代(から抜粋)」をみてください。

――――― 詩をかいていて僕は感じた
漢字はだまっている　カタカナはだまっていない
　　カタカナは幼く明るく叫びをあげる　アカサタナハマヤラワ
漢字はだまっている　ひらがなはだまっていない
　　ひらがなはしとやかに囁きかける　いろはにほへとちりぬるを

あ～わかる わかる、と頷いた方々！･･･もうお判りですよね。文学の「詩文」は文字を目で見て言語的意味を介して味わうが、音楽の「歌詞」は音を耳で聞いて身体言語的に感じる、ということを。　となれば、楽譜の五線譜の下に歌詞が カタカナ や ひらがな で書いてあるのは実に正しい 表わし方であり、声に出して歌うことが詩の正しい味わい方　だということになります。
・・・と、また今回も理屈をこねましたが、僕といえば、音とリズムを外さぬことに精いっぱいで、歌っている最中に詩の意味を味わう余裕などありません。

【編集後記】
☆曲名をネット検索ですれば簡単に音楽が聴ける時代ですので、ぜひとも佐々木さんのお好きなピアノ曲を聴いてみましょう。佐々木さんの日々のピアノの時間を尊敬いたします！
☆「歌はことば」「ことばは音」　意味に溺れることなく淡々と、ことばが聴いている人たちに伝わるように歌うことを、心がけます。（岡田）